

にいたのさくあと 新田柵跡第14次調査

発掘調査成果速報
大崎市教育委員会

はじめに

新田柵跡は、「続日本紀」の天平9年(737)条に陸奥国の国府である多賀城とともに記載される、古代の城柵遺跡です。

遺跡は、大崎市田尻地域大嶺地区・八幡地区に所在し、清滝丘陵とそこから南に延びる尾根、さらに尾根に取り囲まれた低地を含む大規模な遺跡です。これまでの踏査や発掘調査によって、丘陵上に築地塀か土塁と考えられる土手状の高まりが東西約1.5km、南北約1.7kmの範囲で分布することが確認されています(図1)。

過去に行われた発掘調査では築地塀や土塁といった外郭施設の他に、西門や北門、遺跡の内部を区画する材木塀跡、役所の建物である四面廂付掘立柱建物跡など大型の建物が発見されています。

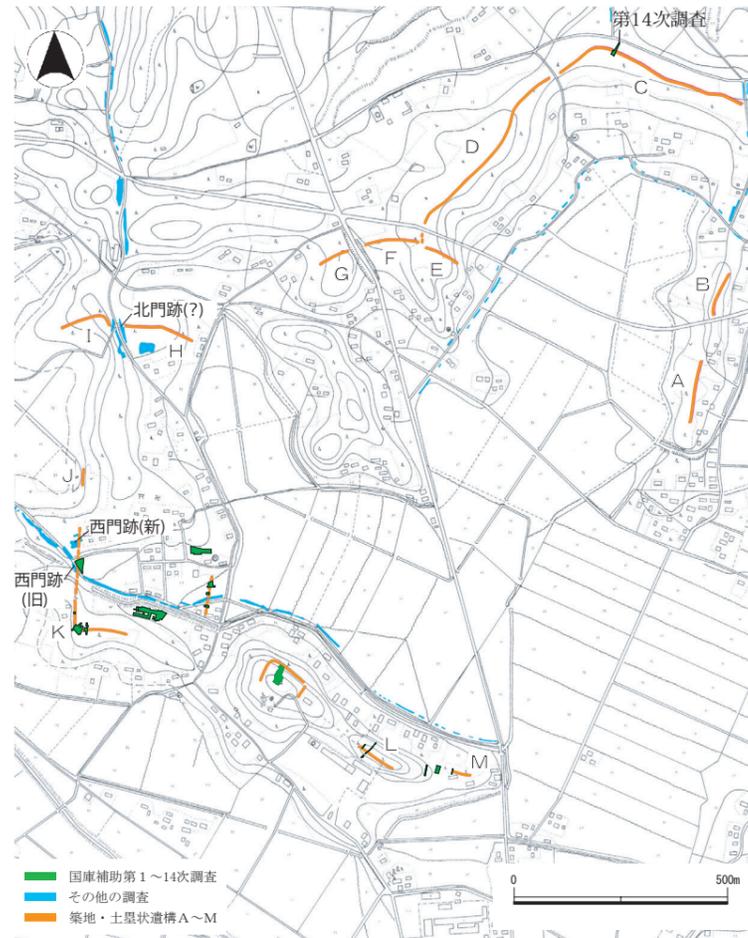


図1 遺跡全体図

調査要項

遺跡名：新田柵跡
調査地：大崎市田尻大嶺字大坊浦・獅子地内
調査原因：学術調査(国庫補助)
調査主体：大崎市教育委員会
調査面積：21.5㎡
調査期間：令和7年11月4日～12月24日

調査の目的

新田柵跡では、平成11年から国庫補助事業で重要遺跡の範囲確認調査を行い、外郭施設や内部施設の解明を目的に発掘調査を行ってきました。平成23年度の調査を最後に中断していましたが、今年度から再開することになり、今回の調査は遺跡の範囲を確定させるために、遺跡の北辺にある土手状の高まりを調査し、その規模や構造を把握することを目的に調査を行いました。

調査成果

★奈良・平安時代の外郭施設

土手状の高まりとその周辺の発掘調査を行い、これらが築地塀、溝で構成される古代の外郭施設であることを確認しました。

築地塀(SF710)：築地塀と基礎整地を発見しました。築地塀は基底部の幅2.41m、高さ0.56mが残存し、基礎整地は幅2.83m、厚さ19.5cmを確認しましたが、築地塀と基礎整地の北側は、これより新しい溝(SD711)が造られた際に、削り取られている可能性が考えられます。

溝(SD712)：築地塀の北側に沿って、上幅3.04m以上、下幅1.18m、深さ0.96m、断面形が逆台形の溝を発見しました。堆積土下部に10世紀前半に降下した灰白色火山灰が堆積しています。

土取穴(SK713)：築地塀の南側に長さ1.85m以上、深さ0.45mの大規模な穴を発見しました。これは、築地塀を造るための土を取った穴と考えられますが、築地塀が使われた時には埋められていたようです。

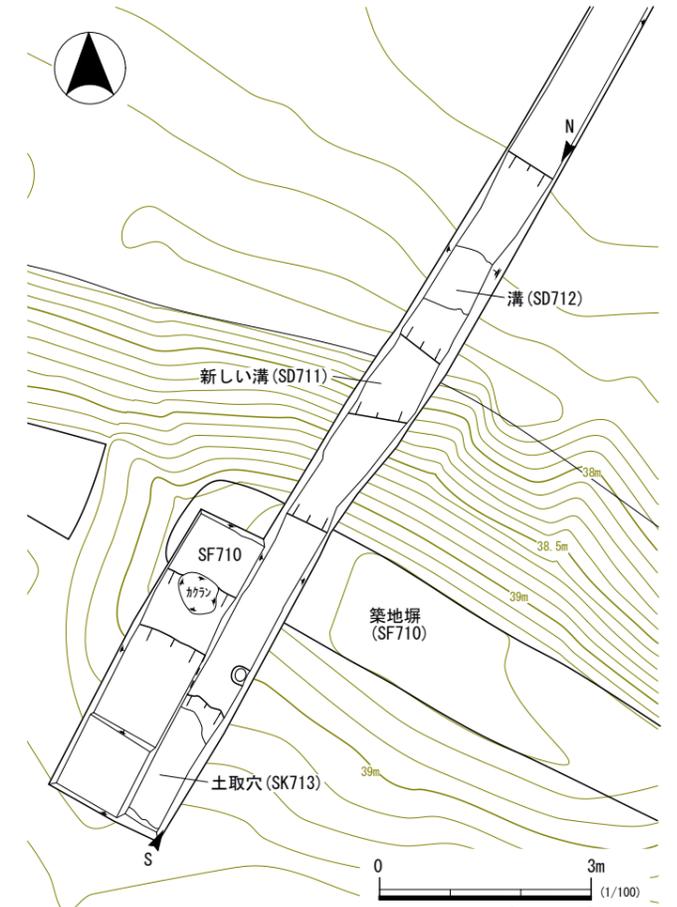


図2 調査平面図

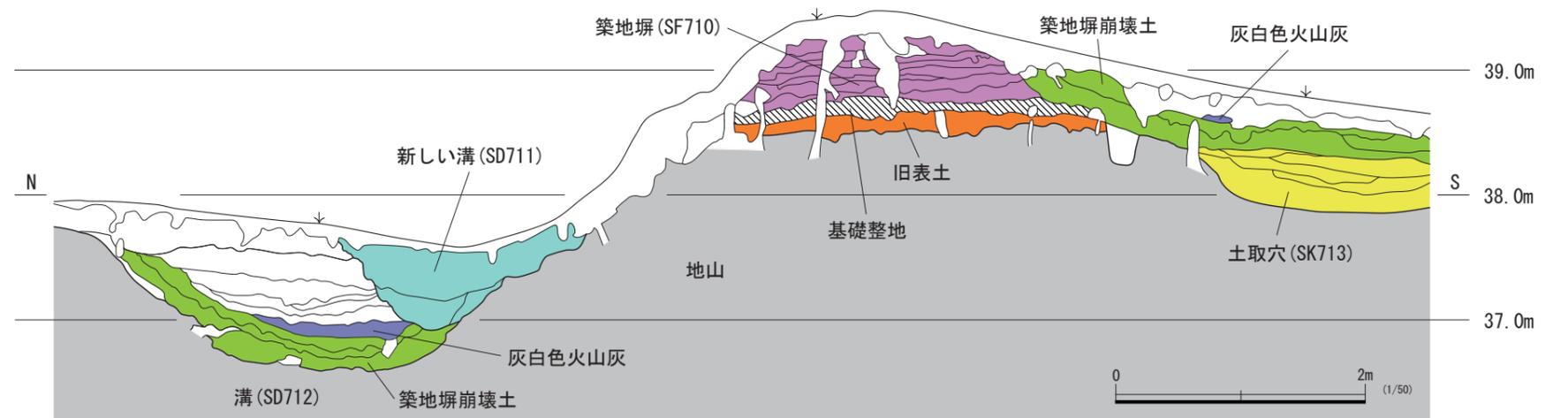


図3 東壁断面図

まとめと今後の展望

- ① 土手状の高まりとその周辺の調査を行い、これらが築地塀、溝で構成される古代の外郭施設であることを確認し、その規模や構造が明らかになりました。
- ② 室内整理で、主に溝から出土した遺物の年代を検討していきます。
- ③ 来年度は、新田柵跡の外郭東辺について調査を行っていきます。



写真1 築地塀 (SF710) と溝 (SD712) (北から)



写真2 築地塀 (SF710) (南から)



写真3 築地塀 (SF710) 東壁断面 (北西から)



写真4 築地塀 (SF710) から土取穴 (SK713) 東壁断面 (南西から)



写真5 溝 (SD712) 東壁断面 (西から)



写真6 土取穴 (SK713) 東壁断面 (西から)

【用語解説】

築地塀：土をつき固めながら積み上げていく「版築^{はんちく}」という工法でつくられた壁体に屋根を設けた構造の土塀。屋根の種類は瓦葺と板葺があるが、今回周囲から大量の瓦は発見されていないことから、板葺の可能性が考えられます。

材木塀：角材や丸材などの材木を立て並べて造った区画施設。築地塀や土塁と併用され、特に低湿地で採用されます。

外郭施設：城柵の建物などを外敵から守るため、取り囲むように造られた築地や土塁、材木塀などの施設です。

四面廂付掘立柱建物：中央の身舎^{みや}の四方に一間分の廂^{ひさし}が配置される構造の建物で、役所や寺院にみられるように、格式の高い建物に採用されました。四方から囲うことで、建物内部の空間利用の多様性が生まれます。

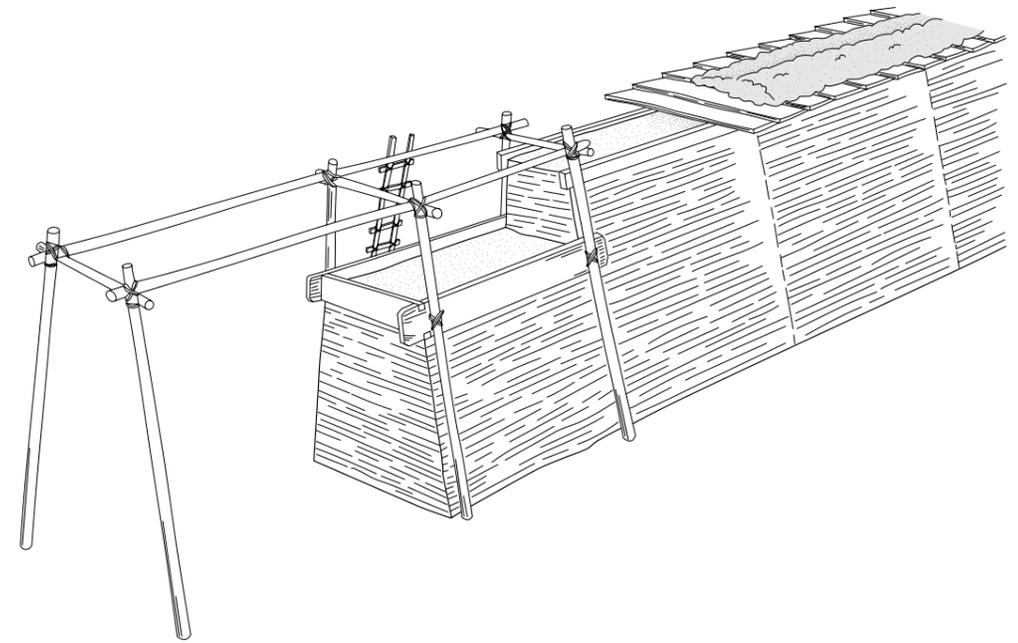


図4 築地塀想像図